

また一つ、

また一つ別の小さな声がきけんだ。

「お帰りなさい。」

冬の夜道は、月が出て、

ずいぶん明るかった。

それにもまして、

②行きずりのわたしの心には、

明るい一本のろうそくが燃えていた。

イ まずしい生活をしている親子のようすがわたしの心を
ろうそくの火のようにくらくした。

ウ いたわりあって、くらしている家庭のようすが、わた
しをあたたかくはげましてくれた。

エ 冬の夜道は月が出て明るかったので、行きずりのわた
しの心まで明るくしてくれた。

3 この詩は大きく二つに分かれていますが、「」の部分
には、次の気持ちの、どれがいちばんよくあらわれていま
すか。よいと思うものを一つ選んで、記号を○でかこみな
さい。

ア つかれきつて帰ってきたひとりの男をむかえる、あた
たかい家族の気持ち。

イ はげしい仕事が終わったので、ほっとして帰ってきた、
ひとりの男の気持ち。

ウ 寒さにあふるえながら帰ってきた、ひとりの男の、つか
れた気持ち。

エ、ひとりの男の帰りを、いまいまかと待っている家族
のさびしい気持ち。

— おわり —